

ピエール・ボナールの《子供と猫》（1906年）という作品、ご存知でしょうか。当館のコレクションの1点、小作品ですが、少女と2匹の猫が描かれたかわいらしい作品です。

この作品が、フランスのラングドック地方にある山間の小さな集落、ロデヴという町の美術館の展覧会へ貸し出されました。



↑町の周囲を川が流れる

ボナールのナビ時代から晩年までの作品を70点ほど集めた「ボナール、日常のすぐれた観察者」という展覧会です。

この展覧会は10月29日で終了し、クーリエとしてこの美術館へ出かけました。クーリエとは、作品の搬送に付き添い、作品状態を確認するという仕事です。

ロデヴ美術館に着いて最初に驚いたのは、建物が非常に古い造りだということです。美術館として使用されている建物は、ルイ15世の司祭を務めたフルリー一家の邸宅です。中央の庭を四角く取り囲むこの建物は16—17世紀に建造されたものです。



展示室に入り、ボナールの作品と対面。



↑黄色い壁に掛けられて、普段とは少し違った表情

まだ学芸員になって間もない頃、作品の貸し出し業務を担当していたのですが、先輩から「作品を貸し出すときは、自分の子供をよその家族に預けるような気持ちで」といわれたことがあります。こうやって他の美術館で久しぶりに作品を見ると、普段以上に親しみ深く感じます。

感慨にひたるのもつかの間、早速クーリエの仕事に取りかかります。まずは展示会の担当者の方と展示の様子を聞きながら、作品の状態チェックをします。それが終わると、作品を運ぶための木箱に納めます。この木箱は今回の輸送のために特別に制作されたものです。的確な素材を用い、寸法も完璧で、安全面でもしっかりしたこの木箱に、ロデヴ美術館のスタッフは感心しきり、「素晴らしい！」と大絶賛でした！



↑本来はセキュリティー上お見せできない木箱の中身。今回は一部ご紹介。箱の中の銀色のシートは、水漏れ防止、断熱、気密性を保持する優れもの。

さて、今回のクーリエ業務、ここからが大変でした。

朝7時美術館から作品を搬出。そのため早起きしてホテルを出ようとしたら、なんとホテルの玄関が閉まって出られない！受付には人がいないし、美術館に電話しても誰も出ないし、ホテルの中をおろおろ行ったり来たり。ようやく7時になってホテルの従業員さんが出てきて、玄関を開けてもらい、美術館へダッシュ！搬出が終わるとすぐにトラックに乗り、パリへ向かいました。フランスを南北へほぼ横断し、なんと12時間にも及ぶ道のりでした。パリに着いたのは夜の9時、美術品輸送会社の倉庫に作品を搬入し、近くのホテルへ直行、翌朝は6時45分ホテル発という、なんともハードなスケジュール(涙)。再び作品を倉庫からトラックに乗せ、空港へ。ここで飛行機に乗せる荷物と一緒に作品が荷造りされる

のに立ち会うのですが、作業が一向に始まらない！結局1時間半も待機状態でした。理由は、飛行機会社のスタッフたちが朝食に出かけていたとのこと…(またまた涙)。12時ごろ作品を飛行機に乗せて、ようやく一息。

翌日関西国際空港へ到着（本当は中部国際空港へ到着したかった…。出発のまさに5日前にパリ名古屋間直行便が閉鎖という不運…）、半日かけて名古屋へ移動。こうして、長い輸送にも耐え、作品は元気に美術館に戻りました。

このように、とんだハプニングにも遭遇してしまう大変なクーリエ業務ですが、よい事もあります。普段個人では行けないような美術館では、情報の少ない希少なコレクションを知ることができます。ロデヴ美術館には、パスキン、スーチン、キスリングなど特にエコール・ド・パリや、デュフィの作品がありました。また美術館との交流も生まれます。今回はロデヴ美術館館長でフォーヴィスムの専門家マイテ・ヴァレ=ブレッド氏と面識を得ることができました。今後、当館との協力関係にプラスになることと思います。

(MRM)